

北海道地区「道の駅」連絡会設立 10周年記念講演セミナー

～地域づくりと道の駅～

日時 平成14年5月14日(火) 13時30分～16時30分 会場 ホテルポールスター札幌
主催 北海道「道の駅」連絡会、(財)北海道道路管理技術センター 後援 北海道開発局、北海道

平成14年3月現在、北海道地区の「道の駅」の登録数は70カ所となり、地域連携がますます求められています。創立10周年を記念し、講演セミナーが5月14日(火) ホテルポールスター札幌で行われました。

主催者として、北海道地区「道の駅」連絡会会長岩内町長岩崎成治氏の開会の辞に始まり「道の駅」を通じた地域づくり、「道の駅」の将来像について熱心な意見交換が行われました。

最後に、当センター理事長木元が閉会のあいさつを行い、約350名の参加のもと盛況裡に終了しました。

■基調講演 牧場をつくろう！～俺の北海道移住計画～



◆講師
タレント
田中 義剛
(たなか よしたけ)

1958年青森県八戸市生まれ。北海道酪農大卒業。学生時代からSTVラジオのディスクジョッキーとして活躍し、芸能活動を始める。中札内村に23万平方メートルの農地を取得し、95年に念願の牧場「花畑牧場」をスタート。

「道の駅」は、私が住んでいる中札内村にもあります。北海道は広いので、トイレがあって助かりますね。いろいろ利用した中でもそばがうまいので「長沼(マオイの丘公園)」が一番好きです。ほかにも素晴らしい「道の駅」がたくさんあり、全道に広がっていることをうれしく思います。

私は牧場をやるときに、まずブランド作りが大切だと考え「花畑牧場」と命名し商標登録をしました。車を売るときには必ずショールームを作ります。それをヒントに、国道の一番メインの所に牧草地を作り、白い牧柵をはって牛・馬を放牧させ、都会の人が「これが北海道よね。こういうところの牛乳やチーズは食べてみたいわ」と思わせることを狙いました。北海道はプロデュースが下手です。環境、空気、自然、人間に触れ合える場を持たなければダメです。うちには半農半芸の「カントリー娘」がいて、農業の楽しさを味わってもらえるような環境づくりを目指しています。これも「花畑牧場」のプロデュースの一環です。大好きな北海道をもっと元気にしたい。北海道の製品はもちろん、「道の駅」もこれからは付加価値が必要です。



道の駅(マオイの丘公園)

■パネルディスカッション 地域づくりと道の駅



◆パネリスト
北海学園北見大学教授
松本 益弘
(まつもと ますひろ)

1933年神戸市生まれ。同志社大学商学部卒業後、近畿日本ツーリスト株式会社に入社。ツーリスト・インターナショナル・アシスタントサービス株式会社代表取締役を経て現職へ。「地域観光振興」などの研究を進めている。

ホスピタリティマインドで観光案内

北海道旅行のパターンが変化しており、従来の貸し切りバスを利用した団体旅行から、個人で来てレンタカーを利用する「FLY&DRIVE」へ移行する傾向が見られます。同行者も多種多様で、「道の駅」のサービスも今までより広く考えなければいけません。

PRがまだ充分とはいえ、便益機能、あるいはサービス機能をPRすべきです。また、案内標識はできるだけ何度も繰り返していただきたい。観光案内をする人はホスピタリティマインドを持って、丁寧に、一生懸命教えてくれる人でなければいけません。人材の資質を、今ひとつ見直すことも必要です。



道の駅(ニセコビュープラザ)案内所



◆パネリスト
(株)リクルート
北海道じゃらん編集長
ヒロ 中田
(ひろ なかた)

1960年広島県呉市生まれ。慶応義塾大学卒業後、株式会社リクルートに入社。「じゃらん～北海道発」のほか、「きまにいい旅」、「観光会議はっかいどう」の編集長も兼務。「スローツーリズム」を提唱中。

地元の食材を生かして

これからの「道の駅」のテーマ&キーワードは「ローカルフードエンターテインメント」です。北海道は農業、水産業、観光の融合が大きなポイントになります。今「道の駅」で地元の食材を使った弁当がわずか5つ。ビジネスチャンスがあるのに、もったいない話です。農産物や水産物の直売所も是非設けてほしい。

エリアを活性化させる意味で、その地域、その町のインデックス機能が必要です。地元のそば粉を使った手打そばが食べられるなど、エリアを回遊させる仕組みづくりが求められています。観光コンシェルジュ的なスタッフを常駐させ、運営の責任者を駅長として任命し、その人にすべてを仕切らせることも大事です。また、営業時間の統一化も必要。個人的に顔ハメ看板に興味があり、「道の駅」を顔ハメ看板天国にしたいとも考えています。アイデアはいくらでもあります。



道の駅（たきかわ）直売所

景観に合ったデザインを



◆パネリスト
(財)日本交通公社 地域調査室長
麦屋 弥生 (むぎや やよい)

1982年津田塾大学学芸学部卒業後、財団法人日本交通公社に調査部研究員として入社。数々の観光計画・地域調査を行っている。「小笠原諸島振興開発審議会審議委員（国土交通省）」などを務める。

民間企業がなかなか進出しにくい場所に公的機関の「道の駅」があることは、利用者として非常に便利です。しかし、地域の景観を上手に表現する、地域の個性を表現している建物、デザインという点ではちょっと苦しい。北海道のブランド力というのは景観に多く依存するところがあり、これから「道の駅」を作る場合は建物のデザインにある程度配慮をしていただきたいと思います。

例えば、駅長さんに民間の方を入れると、いろいろな規制の中で柔軟に運営していただくことも期待できそうです。地域的に集中していても構わず、それぞれが個性を発揮し切磋琢磨して良い「道の駅」が出来ていくと思います。

「道の駅」は町づくりの原点



◆パネリスト
北海道地区「道の駅」連絡会会長 岩内町長
岩城 成治 (いわき せいじ)

1933年岩内町生まれ。83年から岩内町長に就任し、以来、5期にわたり岩内町民と共に豊かなまちづくりに取り組む。後志町村会会長など数々の分野で積極的な活動を行っている。

「道の駅」はトイレの問題に頭を痛めています。釣り人が洗面所で魚を三枚におろし蔵物を平気で捨てていくんです。国民的なマナーの問題として改善に取組まなければいけません。鉄道が廃止され大量輸送や過疎の問題が進み、道路が鉄道の代わりになるような整備が必要です。やはり道路は線なのです。これからは箱物に頼らない「道の駅」をつくっていくことが、町づくりの原点だと思います。

総括

地域づくりと道の駅

競争原理を働かせ質の向上を

「道の駅」は、利用するユーザーの立場で安心、快適という発想から展開されてきました。ソフトで新しい道路行政の政策展開として評価できると思います。地域の振興を考えて行く中で「道の駅」の現状をしっかりと見定め、交通政策と地域振興策の連携に目を向けなければいけません。「道の駅」は非常にゆるやかな制度で、画一的な政策のマニュアルでつくられおらず、競争原理を働かせながら相互に質の高いものを目指すことが大事だと思います。



◆コーディネーター
釧路公立大学教授 地域経済研究センター長

小磯 修二 (こいそ しゅうじ)

1948年大阪市生まれ。京都大学法学部卒業後、国土庁計画・調査局計画課専門調査官を振り出しに、北海道開発局長官房人事課長などを務める。実践的な地域活動に従事。

「道の駅」の施設構成の基本コンセプト

1. 無料で利用できる十分な容量の駐車場
2. 24時間利用可能な清潔な水洗トイレや公衆電話
3. 道路や地域の情報を提供する施設
4. 年少者・高齢者・身障者等、様々な人に配慮した施設など